

地域看護学実習における健康教育指導案の対象把握の実態

青山 京子, 古田加代子, 佐久間清美, 柳澤 理子, 飯田 蓮子

Student Understanding of the Target Population in Community Nursing Practices: Analysis of Health Education Plans

Kyoko Aoyama, Kayoko Furuta, Kiyomi Sakuma, Satoko Yanagisawa, Hasuko Iida

地域看護学実習で学生が実施した健康教育の指導案をもとに、『対象』と『対象の特性』について健康教育の企画段階における対象把握の視点を分析した。学生は、妊婦、高齢者のどちらの場合も【対象者背景】や【心身の状況】など、健康教育に参加する対象住民の一般的な背景や健康状況については、着目視点の違いはあるが14事例すべてにおいて着目した記述ができていた。しかし、【健康課題】や【母集団】に関連した内容を把握した記述は、妊婦、高齢者ともに14事例中6例、【地域背景】は1事例であった。生活特徴や参加者の知識や意欲、取り組み状況の視点については事例間で記述の差違があり、講義や演習での対象把握に関する学びが実習記録の記述までには活かされないという課題がみえた。健康教育の実践能力を強化するためには、講義・演習から実習までをできるだけ連動させて継続した学びが得られるように学習進度を工夫するとともに、学生の興味や関心、意欲を引き出していく教授法や指導方法が重要であることが示唆された。

キーワード：健康教育，対象把握，地域看護学実習

I はじめに

保健師が携わる地域保健活動は、地域住民の健康の保持および増進をとおして、地域住民の健康度の向上と健康生活の実現を目指す活動である。健康度の向上について、健康増進法第2条では、国民の責務について「国民は、健康な生活習慣の重要性に対する関心と理解を深め、生涯にわたって、自らの健康状態を自覚するとともに、健康の増進に努めなければならない」と示している。

健康教育は、教育という方法をとおして対象者の健康に対する関心や知識の底上げを図り、その人々がより健康な行動様式を選択し実行できるように方向づけする目的を持っている。同時に、健康教育は地域の一定数の人々に一斉に行われるものであるため、その集団の共通認識をつくることが可能である¹⁾。つまり、健康教育は対人保健サービスを行う際の最も有力な道具になる方

法²⁾であり、地域保健活動における対人保健サービスの中心的な担い手である保健師にとっては大変重要な技術である²⁾。

地域保健活動の実践現場においては、新卒保健師の実践能力の低下が課題になっている。また、全国保健師教育機関協議会が実施した「保健師教育の課題と方向性明確化のための調査」でも、大学卒業時の到達度の低さが報告され、保健師の実践能力の強化が指摘されている³⁾。堀川らの先行研究⁴⁾では、健康教育の実践能力を養う上で、対象理解から企画立案、実施、評価までの一連のプロセスを臨地実習において学び深めることの重要性を強調している。

本学の地域看護学実習は、健康教育の実践能力を高めるために、全学生が個々に地域住民を対象とする健康教育の実施を課している。健康教育を成功するためには、性、年齢、職業、家族など対象の属性の把握と、対象の健康状態や日常生活の状況、価値観やテーマに対する希

望や関心状況を把握することが重要である⁵⁾。つまり学生が自立して健康教育を実施できるようにするためには、学生自身が対象の特性を具体的に把握して描けるようにしておくことが必要である。

しかし、健康教育に関する先行研究においては学生の学びについての報告はあるが、対象把握に関する研究は見当たらない。

本調査は、学生が地域看護学実習における健康教育の企画段階で着目した内容をもとに、対象把握の視点を明らかにし、今後の健康教育に関する教授法や、実習指導に役立てることを目的として行った。

II 健康教育に関する教授方法の実際

1. 講義

本学の健康教育に関する講義は、2年後期に地域看護方法論Ⅰ（2単位60時間）の中で、20時間程度の講義と演習を行っている。講義では、健康教育の目的や対象者の把握、健康教育の展開、健康教育に活用できる理論など、基本的な健康教育の企画及び実施とその評価について学習している。その中で対象把握については、健康教育が健康に関する知識の普及・啓発、健康課題に対する動機付けおよび行動変容を目的とすることから、住民の健康状態、健康課題に関する認識、生活行動や保健行動の実態等を把握することが重要であることを強調して教授している。さらに演習では、1グループ9名程度で、テーマごとに分かれて健康教育の指導案を作成している。その際は記入方法を提示するとともに実習と同じ記録用紙を使用し（図1）、完成後は、指導案を基にクラス全体でテーマごとに健康教育を実施し、それぞれの発表について全員で評価を行っている。

2. 実習

地域看護学実習は4年前期に3単位135時間（15日間）で、市町村9日間に続いて保健所5日間の実習と、最終日の学内カンファレンスである。学内カンファレンスは、地域看護学実習の目的・目標にそった学びのグループ発表と意見交換によって、学びの共有と強化を図っている。健康教育は、市町村実習で一人10分程度を実施している。

地域看護学実習を進めるにあたり本学では、実習前に実習施設の現地オリエンテーションに出席して、実習指導者から市町村の概況や保健事業実施状況および、健康教育のテーマと対象者の状況等について指導を受けてか

ら、健康教育の企画・立案に入る形をとっている。その上で学生は自分で指導案を作成して、教員の助言指導を受けて実習に臨んでいる。

実習中は、実習指導者から指導案に対する助言を受け、1回以上のリハーサルを実施している。リハーサルでは、実習指導者、教員、実習グループメンバーなどが参加して、健康教育のテーマ、目的、対象等に合致するように修正を行って進めている。このような一連の過程によって指導案の精度を高めて完成させ、地域住民を対象にした健康教育を実施する。

III 方法

1. 対象

平成21年度地域看護学実習において、学生が実施した健康教育の対象及びテーマは、表1のとおりである。

実施した健康教育を対象種別で分けると、母子19事例、成人・高齢者22事例の計41事例であった。これら全ての事例の中から、各種別で最も多く実施したテーマを取り上げ、その健康教育指導案を分析の対象とした。母子では、妊婦の「妊娠中の過ごし方」を取り上げた7事例、成人・高齢者（以下「高齢者」という）では、高齢者の「転倒予防」を取り上げた7事例の計14事例を対象とした。

2. 分析方法

第1段階は、対象事例について、健康教育終了後に最終提出された健康教育指導案の様式5-1の『対象』と『対象の特性』の2項目について、対象に関する最小単位の記述の読み取りを行った。さらに共通の意味内容のものを集めて小カテゴリーとし、類似している項目を集めてカテゴリーとした。

第2段階は、抽出した小カテゴリーにあわせて、対象把握の何に着目していたかをカウントし、事例ごとに小カテゴリーについて着目できているか否かを検討した。

分析にあたっては、実習を担当した4名の教員で意見の一致をみるまで討議を行った。

3. 倫理上の配慮

学生に対する研究協力の依頼は、地域看護学実習評価の後に行った。対象となった学生には、研究の目的および既に提出している健康教育指導案（図1、様式5-1）を用いて分析すること、健康教育指導案は個人が特定でき

様式5-1

健康教育 I

実習施設	学籍番号
テーマ	
目的	閉値
目標	閉値
対象	担当
対象の特性	
企画に至った経緯(テーマ選定の理由含む)	必要
保健事業名	会場
保健事業全体の構成	
周知方法	
評価計画	参考

様式5-1

【記入例】 健康教育 I

実習施設	学籍番号	氏名
テーマ	<ul style="list-style-type: none"> 決定しているテーマを示す。新たにテーマをつける場合は対象を引くテーマを工夫して示す。 	
目的	開催日時	
<ul style="list-style-type: none"> 今回取り上げた健康課題について、対象者がどうなることが好ましいかを示す。 	平成 年 月 日 () 午前 午後 時 分 ~ 時 分	
目標	開催場所	
<ul style="list-style-type: none"> 今回の健康教育を受講して到達して欲しい目標を示す。 認知領域(物事を理解する知的能力に関すること)、情覚領域(興味、関心、態度などにみられる情動)、精神運動領域(運動技能や技術および行動などの能力)に分類して記述することが望ましい。 	<ul style="list-style-type: none"> 施設名、会場名を示す。 	
対象	担当者および役割	
<ul style="list-style-type: none"> 健康教育の対象者を誰にし、対象人数は何人にするのかを示す。 	<ul style="list-style-type: none"> この健康教育に関わる人(職種)とその役割を示す。 	
対象の特性		
<ul style="list-style-type: none"> 対象が健康課題についてどのように考えているか、生活様式、生活習慣、地域の風習などと健康課題の関連性など、把握している対象の実態について示す。 		
企画に至った経緯(テーマ選定の理由含む)	必要物品	
<ul style="list-style-type: none"> 保健師がどのような経緯をとり、この健康教育を企画したのかを示す。 今回のテーマを取り上げた理由、意義などについて保健師の考え方を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要物品を数も含めて示す。 	
保健事業名	会場設置	
<ul style="list-style-type: none"> 事業名を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> 会場の設置について、物品の配置、保健師・住民の位置、教材の掲示場所などを含め、図示する。 	
保健事業全体の構成		
<ul style="list-style-type: none"> 全体の保健事業の構成と、その中で今回の健康教育がどこに位置付かがわかるように示す。 (複数回にわたる事業の一部である場合は、そのことがわかるようにする。) 		
周知方法		
<ul style="list-style-type: none"> この健康教育の開催を物理的に知らせる方法を示す。 		
評価計画	参考文献	
<ul style="list-style-type: none"> 計画の段階で、評価時期、評価指標、評価方法を含めて示す。 	<ul style="list-style-type: none"> 健康教育実施にあたって使用した文献を示す。 	

愛知県立看護大学 地域看護学実習

図1 健康教育記録用紙(様式5-1)と記入方法

ないようにデータを加工して使用すること、研究協力の有無は成績に全く影響を及ぼさないこと、結果は公表することなどについて口頭と文書で説明し、文書で同意を得た。

IV 結果

学生の健康教育企画段階における、対象把握状況は次のとおりである。

なお、カテゴリーを【 】で、小カテゴリーを〔 〕で示す。

1. 妊婦に対する健康教育について

妊婦に対する健康教育7事例について表2に示した。

事例Aの場合、学生が着目した視点の【対象者背景】は〔種別〕〔多い妊娠月数〕〔初産・経産の別〕〔人数〕〔夫の参加の有無〕の5項目、【心身の状況】は〔身体的変化に伴う心理状況〕の1項目、【健康課題】は〔健康課題に

表1 学生が実施した健康教育の対象およびテーマ

対象	テーマ	事例数
母子		
妊婦	妊娠中の過ごし方	7
乳幼児	乳幼児の事故防止	5
	4ヶ月児の発達と保育	4
	1ヶ月児の保育	1
	乳児の病気と対応	1
	乳幼児の生活リズム	1
小計		19
成人・高齢者		
高齢者	転倒予防	7
	脱水予防	3
	認知症予防	2
	熱中症予防	1
	口腔機能の向上	1
	栄養の取り方	1
成人・高齢者	睡眠	1
	乳がん自己検診法	4
	ストレス解消	1
	骨粗しょう症	1
小計		22
合計		41

に対する関心度〕〔健康課題に対する知識〕〔健康課題に対する意欲〕の3項目であった。同様に事例Bについて見ると、【対象者背景】は〔初産・経産の別〕〔来所の主目的〕の2項目、【健康課題】は〔健康課題に取り組む必要性〕の1項目であった。事例Cの【対象者背景】では〔年齢〕〔月例・週数〕〔初産・経産の別〕〔人数〕〔夫の参加の有無〕〔ソーシャルサポートの程度〕の6項目、【地域背景】では〔地域の間関係〕に着目していたが、【健康課題】の着目はなかった。事例DからGについて見ると、【対象者背景】は着目していたが、【健康課題】の着目は事例Dのみで、差異が認められた。

妊婦を対象とした7事例の【対象者背景】の視点は、網掛けの部分を見ると項目数の差はあるが、全部の事例で着目されていることが分かった。【心身の状況】についての着目は2事例、【健康課題】についての着目は3事例、【母集団】についての着目は2事例、【地域背景】についての着目は1事例であった。

Bの事例では、〔初産・経産の別〕〔来所の主目的〕〔健康課題に取り組む必要性〕の3項目で対象把握を行い、健康教育の指導案を作成していることがわかった。また、地域の特性ともいえる【地域背景】については事例Cが着目していることがわかった。

2. 高齢者に対する健康教育について

高齢者に対する健康教育7事例について表3に示した。事例Hの場合、学生が着目した視点の【対象者背景】は〔年齢〕〔所属〕の2項目、【心身の状況】は〔自立度〕〔健康度〕の2項目、【母集団】は〔所属集団の目的〕の1項目であった。しかし【健康課題】については着目できていなかった。事例Iについてみると【対象者背景】は〔種別〕〔人数〕〔対象者の住環境〕の3項目、【母集団】は〔母集団の特徴〕〔管内市町村と比較した実態〕の2項目に着目して、【心身の状況】や【健康課題】については着目されていなかった。同様に事例Jについてみると【対象者背景】は〔種別〕〔年齢〕〔人数〕の3項目、【心身の状況】は〔活動度〕〔健康度〕の2項目、【健康課題】は〔健康教育を受けるリピーターの存在〕の1項目、【母集団】は〔対象者集団の間関係〕の1項目であった。事例Kについてみると【対象者背景】は〔種別〕〔年齢〕の2項目、【心身の状況】は〔健康度〕の1項目、【健康課題】は〔転倒リスク〕〔転倒恐怖〕〔転倒経験〕〔健康課題に関する知識〕〔日常生活の中での健康課題の取り組み状況〕〔健康教育を受けるリピーターの存在〕の6項目であった。事例Lの【対象者背景】は〔種別〕〔年齢〕〔多い年齢層〕〔性別割合〕〔人数〕の5項目、【心身の状況】は〔身体的特長〕〔自立度〕〔健康全般に対する関心度〕の3項目、【健康課題】は〔転倒リスク〕〔転倒恐怖〕〔転倒経験〕〔健康課題に取り組む必要性〕〔健康課題に対する意欲〕〔健康教育を受けるリピーターの存在〕の6項目であった。事例Mの【対象者背景】は〔種別〕〔所属〕の2項目、【心身の状況】は〔自立度〕〔対象者の身体状態に関する自覚〕の2項目であり【健康課題】については着目はされていなかった。事例Nの【対象者背景】は〔年齢〕〔性別割合〕〔所属〕の3項目、【心身の状況】は〔身体的特徴〕〔自立度〕〔活動性〕〔健康度〕〔健康全般に対する関心度〕の5項目、【母集団】は〔対象者集団の間関係〕の1項目であった。しかし【健康課題】のについての着目はされていなかった。

高齢者を対象とした7事例の網掛けの部分を見ると、妊婦の場合と同様【対象者背景】については項目数の差はあるが、全部の事例で着目されていることがわかった。【心身の状況】については6事例(H, J, K, L, M, N)が着目していた。しかし、【健康課題】についての着目は、J, K, Lの3事例に留まっており、着目の差が明らかであった。また、【母集団】については4事例(H, I, J, N)が着目していた。

表2 妊婦に対する「妊娠中の過ごし方」の健康教育における対象把握の視点

カテゴリー	小カテゴリー	事 例							着目事例数
		A	B	C	D	E	F	G	
対象者背景	種別	○			○				2
	年齢			○		○			2
	週数・月数			○	○	○			3
	多い妊娠月数	○						○	2
	初産・経産の別	○○	○	○					3
	人数	○		○		○	○		4
	夫の参加の有無	○		○	○	○○		○○	5
	来所の主目的		○		○	○	○		4
	家族形態						○		1
	ソーシャルサポートの程度			○			○		2
心身の状況	身体的特徴							○	1
	身体的変化に伴う心理状況	○○○							1
健康課題	ライフイベント				○				1
	健康課題に関する関心度	○							1
	健康課題に対する知識	○○○							1
	健康課題に取り組む必要性		○						1
	健康課題に対する意欲	○							1
	健康課題に対する主体的取り組みの可能性				○				1
母集団	管内市町村等と比較した人口に関する実態						○○	○	2
	母集団に関する実態							○○○	1
地域背景	地域の人間関係			○					1

注) ○：学生が着目した項目個数 ■：学生が着目した項目

V 考 察

平成21年度地域看護学実習における健康教育の企画段階で学生が注目した対象把握の視点から、今後の健康教育の教授法や実習指導について考察した。

1. 健康教育における対象把握の理解

学生の健康教育の対象把握に対する着目について、【対象者背景】は妊婦・高齢者とも全ての事例で把握していたが、【健康課題】の把握については妊婦も高齢者も半数に満たなかった。

学生は、健康教育指導案の企画段階の妊婦と高齢者の対象把握の着目から、【対象者背景】は記述しやすいが、【健康課題】に関連する記述はできていないという課題が明らかになった。健康課題についての記述が少なかった理由として、学生は地域で健康に生活している対象者の健康課題の把握については、疾患の把握と違い、イメー

ジして記述することが難しいと考えられる。角田は、学生は動脈硬化予防などについてわかりやすくイメージできるが、参加者の生活の実態や考えを他の参加者と比較することにより、健康生活への関心を深め主体的な学習とすることは難しいことをあげている⁶⁾。

今回分析で取り上げたテーマについて学生がイメージし、健康課題として記述することが望ましいことは、例えば「高齢者に対する転倒予防」を例に取った場合、老化による機能低下やそのことによる不自由さに関連した転倒リスク、さらには転倒経験の有無やその経験に対する高齢者自身の受け止め、危険を回避するための意欲や知識、実際の行動などについて、高齢者自身に置き換えて考えられることである。しかし学生は、祖父母との同居率の低さや自分と異なる年代の生活実態についての興味・関心が低いこと等から理解が浅くイメージが難しいと考えられる。

学生が対象把握を行うにあたっては、教員や指導者は、対象者の健康課題に対する知識や必要性、関心度、意欲、

表3 高齢者に対する「転倒予防」の健康教育における対象把握の視点

カテゴリー	小カテゴリー	事 例						着目事例数	
		H	I	J	K	L	M		N
対象者背景	種別		○	○	○	○	○		5
	年齢	○		○	○	○		○	5
	多い年齢層					○			1
	性別割合					○		○	2
	人数		○	○		○			3
	所属	○					○	○○	3
	対象者の住環境		○						1
心身の状況	身体的特徴					○		○○○ ○	2
	自立度	○				○	○	○	4
	活動性			○				○	2
	健康度	○		○	○			○	4
	対象者の身体状態に関する自覚						○○○		1
健康全般に対する関心度					○		○○	2	
健康課題	転倒リスク				○	○			2
	転倒恐怖				○	○			2
	転倒経験				○	○			2
	健康課題に関する知識				○				1
	健康課題に取り組む必要性					○			1
	健康課題に対する意欲					○			1
	日常生活の中での健康課題の取り組み状況				○				1
健康教育を受けるリピーターの存在			○	○	○			3	
母集団	母集団の特徴		○○						1
	管内市町村等と比較した実態		○						1
	所属集団の目的	○○○							1
	対象者集団の人間関係			○				○	2

注) ○：学生が着目した項目個数 ■：学生が着目した項目

生活態度などとともに、学生自身の生活体験をも考慮した、身近な体験から興味を持たせ、生活と健康の関連を考えさせるなど具体的な指導・助言をする必要があると考えられる。

2. 健康教育指導上の今後の課題

1) 講義・演習及び臨地実習の連動

臨地実習においては、講義・演習で学習した知識と技術をもとに学習を進めることが必要である。本学では、健康教育の講義は2年後期に実施しているが、地域看護学実習は4年前期のため約1年間の空白がある。そのことにより、学生は講義や演習での対象把握に関する学びが実習記録の記述に活かされないという課題がみえる。

堀川の研究においても「健康教育学」終了から臨地実習までのブランクは、講義での学びを実習に活かすきれていないとして、科目間連携による継続した学びの可能性を指摘している⁷⁾。

学生の対象把握の実態から、講義・演習から実習までの連動の難しさが示唆され、学習進度や教育方法は本学の課題であるといえる。

2) 学生の健康教育に関する指導課題

妊婦や高齢者に対する健康教育で【健康課題】に着目している事例は全14事例中6事例、【母集団】に着目している事例は全14事例中6事例であった。学生の着目した視点が事例により差がみられるのは、担当教員や実習指

導者の指導方法が影響していると推察される。また、着目がされていない事例から推測すると、地域で健康に生活している対象者の健康課題の把握について着目の難しさが考えられる。健康な住民の生活実態と健康との関連に目を向けさせて、いかに興味を持たせるかが、教員や実習指導者の重要な役割であると考えられる。

3. 研究の限界と課題

今回の分析においては、健康教育指導案に記載された項目のうち、『対象』と『対象の特性』について行った。しかし対象把握については、健康指導案の他の欄（例：企画に至った経緯）に記載していることも考えられるため、今後はその欄も含めた分析が必要となる。また、提出された学生の記録のみで分析を行ったため、学生が対象について把握している事柄全てを記載しているとは限らない。したがってカンファレンスや指導の過程で学生の発言を拾うなどの工夫も必要であった。このことも本研究の限界である。

V まとめ

平成21年度地域看護学実習における学生の健康教育指導案を用いて、健康教育企画段階での対象把握の実態について分析した。学生は、妊婦、高齢者のどちらの場合も、【対象者背景】や【心身の状況】など、具体的に参加者に関連することについては多くが着目できていた。しかし、【健康課題】や【母集団】に関する項目については、事例により把握状況に差異があった。また、学生は健康教育指導案作成時の対象把握について着目する視点が事例により異なることがわかった。こうしたことから今後は、健康教育の実践能力を強化するために、学生の興味や関心を引き出していく教授法や指導方法が重要である

ことが示唆された。

謝 辞

地域看護学実習につきましては、お忙しい中ご指導くださいました地域看護学実習施設の実習指導者の皆様をはじめ職員の皆様に深謝申し上げます。また、研究に快くご協力くださいました学生の皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 村嶋幸代：地域看護支援技術. 村嶋幸代（編）最新保健学講座2 地域看護支援技術. pp. 2-12, メヂカルフレンド社, 2008.
- 2) 前掲書1).
- 3) 「保健師教育の課題と方向性明確化のための調査」：平成20年度「保健師教育の課題と方向性明確化のための調査」報告書（第2版）. 全国保健師教育機関協議会, 2009.
- 4) 堀川淳子, 真嶋由貴恵, 石原逸子：「健康教育」実施能力を育成する教育方法の課題—産業看護実習における集団健康教育実施後意識と気づきの分析より—. 産業医科大学：41-349, 2003.
- 5) 宮坂忠夫：健康教育計画の企画, 実施と評価. 宮坂忠夫, 川田智恵子, 吉田亨（編）最新 保健学講座別巻1 健康教育論. pp. 193-206, メヂカルフレンド社, 2008.
- 6) 角田あゆみ, 奥山則子, 杉本正子, 安田美弥子：保健師学生の健康教育実践の分析. 東京都立医療技術短期大学紀要. 9：237-250, 1996.
- 7) 前掲書4).